

世界史における日本の立ち位置の確認、

そして、フクシマの問いかけるもの 川辺

「日本」はどうなるのか、「故郷」はどうなるのか、アジアの「発展」の道筋をどうつけるのか・・・これらのテーマが私の頭の中で渦を巻いている。

原爆から原発まで、被害と加害を、一つの枠組みの中で考えることが課題になっている。前提となる事柄を整理することから初め、最近の見聞を通しての感想を述べたい。

- I. 後進資本主義国日本と二つの世界大戦そして原爆投下・・・加害と被害の事実
- II. とアメリカの戦略、核開発と原子力発電所・・・「平和利用」「安全」のPR
- III. 思うこと、必要なことは何か

I. 後進資本主義国日本と原爆投下

19世紀、欧米に近代資本主義世界が成立した。日本はドイツ・イタリアと共に後進資本主義国として19世紀後半に仲間入りした。国民国家をつくり工業化・都市化がすすみ、A・A・LAの植民地獲得争いを始めた。20世紀に入り、世界分割戦争・第1次世界大戦となった。

第2次産業革命の結果、飛行機・戦車・毒ガスが登場、総力戦となった結果は悲惨だった。社会・人間をこわす現代兵器の破壊力は、講和会議や条約で新しい体制・提案抜きでは収まらなかった。4つの帝国が崩壊、ロシア革命により社会主義国家が誕生した。一方、敗戦国ドイツに対しては膨大な負担が課せられた。国際連盟の創設、不戦条約の締結、講和条約の5条には、植民地問題の公正な解決

目次

世界における日本の立ち位置の確認、 そして、フクシマの問いかけるもの・・・1	
柏崎刈羽と広島・・・・・・・・・・・・・7	
原爆被爆者補償と 在外被爆者に関するメモ・・・・・・・・・・10	
第19回陝川交流会大会要項・・・・・・・・・・13	
『東学農民戦争と日本 —もう一つの日清戦争—』・・・・・・・・15	
短信・・・・・・・・・・・・・16	

も入れられた。

日本は、日英同盟で戦勝国になったが、ヨーロッパが味わった現代戦の悲惨さを体験せず、旧ドイツ領に進出するなどして、世間知らずの一等国気分になったことは、次の戦争に安易に乗り出す背景となった。三・一運動や五・四運動で示された、世界を知ったアジアの真っ当な主張に耳を傾けることなく、大東亜共栄圏という虚像を追い求めた。

大恐慌でさらに悲惨になったドイツ経済を解決するとしてユダヤ人排斥のヒトラーが選ばれ、ムッソリーニのイタリアと共に、日本は、日独伊防共協定・三国同盟を結び第2次世界大戦・アジア太平洋戦争に突入した。その結果の犠牲者の数字をあげる。

世界全体で、約6000万人

アジアで、約2000万人

ソビエト連邦は、約2000万人

中国は、約1000万人

ポーランドは、約560万人

ドイツは、約550万人。ユダヤ人約600万人、強制収容所で殺害される。

米・英・伊・仏がそれぞれ、約70万人～約35万人

日本は、約310万人（朝鮮・台湾の犠牲者約5万人）以下も概数

当時海外に配置された日本軍は335万人。満州に67万人、中国本土に112万人

南京占領にあたって婦女子を含む殺害・・・南京事件

東京大空襲・・・一夜で10万人犠牲

沖縄戦・・・当時の人口42万人のうち12万人以上、4人に1人が犠牲

原爆投下・・・広島で14万人犠牲（朝鮮人3万人、生き残った被爆者2万3000人が韓国に帰国、8000人が北朝鮮に帰国）

長崎で7万人犠牲

シベリア抑留・・・107万人が捕虜。強制労働で34万人が犠牲

（ワールドアルマナック等参考。推計）

こうしてみると、勝者も敗者もなく、戦争の過酷さを思い知る。国民からすればまず、「被害者」である。しかし、「加害者」である、特にドイツ人のユダヤ人に対する行為、日本のアジア諸国に対する行為の罪悪の大きさを知る。社会主義ソ連邦とポーランドの犠牲の大きさも際立つ。抗日運動の激化の中でのアジア諸国で社会主義勢力が増大し、パレスチナにイスラエルが建国されたことは、戦後世界も大きな対立を背負うものとなった。

国際連合ができ、世界人権宣言が出され、第3次世界大戦は絶対に起こしてはならぬという強い希求が生まれた。しかし、欧米資本主義諸国の、共に連合軍として戦った社会主義ソ連邦への警戒・対立は戦争終結にむけてより明確になり、日本に対するアメリカによる原爆投下もすでにその意図の下実行された。冷戦の始まりである。

II. 戦とアメリカの戦略、核開発と原子力発電所・・・「平和利用」「安全」のPR

1945年8月15日をもって日本人は、戦争が終わった「終戦」という。焼け野原が拵がり、家族を失い、病傷で苦しんだ人も多かったが、空襲も召集令状もなくなり、ホッとじて食べるために懸命に働いた。「敗戦」「光復節」という呼び方を知ったのは、私自身、大学生になってからだった。「原爆投下」の事実そのものも、米軍の占領下、報道管制がしかれ、「アサヒグラフ」の特集号で広く知られるようになったのは占領状態が終わった1952年

であった。丸木位里さんが故郷・広島に数日後入り、俊さんと共に、1950年より「原爆の図」を描き日本・世界各地を巡回して知らせた意義は大きかったといえよう。

2つの原爆投下は、日本からすれば悪魔の兵器である。アメリカからすれば、アメリカ人の犠牲者を減らし、さらにソ連に対抗するための武器の性能実験という位置づけであり広島市内比治山に建てられたABCC（原爆障害調査委員会）は放射能の影響調査・データ収集が役割で治療はしなかった。それが国家としてのアメリカのスタンスであった。個人としての援助はあったが。

連合国軍による日本の戦争犯罪を問う極東国際軍事裁判（東京裁判）を早めに切り上げ、戦前の保守層を復活させ、冷戦下米軍に役に立つ日本の再建がアメリカの日本への戦略となる。沖縄をはじめ各地に米軍基地が建設され、「民主主義」も「平和主義」もその限りで制約のあるものであった。米軍の単独占領、冷戦の激化という枠組みの下、平和を願い、先の戦争の原因を考え、指導者の責任を問う、アジアの被害者に思いをはせ償いをするという、日本国民としての反省は、ほとんど封じ込められた。

これまで、戦争中の苦勞、アジア各地から引き揚げてくる時の苦勞、疎開や学徒出陣、特攻隊への同情は聞こえても、戦地であったこと・見たことは、やっと最近語られるようになった。この世を去る前に、自分の体験・真実を話しておきたいという、90歳前後の方の記事を目にすることがある。戦後の平和な日本で、分かってもらえないだろう、積極的に話すようなことではない、と胸に畳んできたが、従軍慰安婦問題にしても、発言する方が増えている。こうした体験を丁寧に聞くこと、今、私達にも、政府にも本腰を入れて聞き取り・記録し、国民共有の財産にすることが求められているように思う。戦前の臣民としては被害者であり、一方、アジアの人々に対しては、加害者であったことを、出兵兵士の体験を通して知ることが「自虐的」として封じるべきことなのであろうか。世界から「歴史を大事にしない・直視しない国」との見方に対する答えにもなるであろう。

19世紀、アジアで唯一の近代国家を作った日本は、後進資本主義国としての無理もあった。その過程で近隣の国々に苦難を与えたことを率直に認め、謝罪したい。近代化は工業化・都市化であり、効率的で便利な社会が出来るが、問題も多い。究極の問題は原子力の利用であろう。日本が体験した試行錯誤・光と影、失敗も含めて丸ごと見つめ、伝えていくことが、近代化に足を踏み入れ、同じように努力している国々と仲良くしてゆく道ではないだろうか。

戦後史を、アジアの冷戦と原子力の利用に限って、簡単に整理してみたい。

- 1945年 ポツダム宣言受諾（日本の無条件降伏）、降伏文書調印。
- 1948年 日本に植民地支配された朝鮮半島には米ソ両軍が南北より入っていたが、その影響下に、大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国が成立。
- 1949年 抗日戦の中で成長した中国共産党が指導する中華人民共和国が大陸に成立。アメリカが援助した蒋介石は、台湾に渡り中華民国を統治。ソ連邦の核実験成功。
- 1950年～53年 朝鮮戦争。冷戦から熱戦、原爆投下も検討される。
- 1951年 サンフランシスコ講和会議、平和条約締結。日米安保条約締結。日本、占領統治終了、国際社会復帰。50年代、米軍基地拡張さかん。
- 1953年 アイゼンハワー米大統領、国連で「原子力の平和利用」演説、原子力は怖くない、最先端の、人間に役に立つ科学技術であることをアピールするために日米両政府は協力するようになる。このため、科学者も被爆者も広島市も

利用される軍事力をもって圧力を加え、自らの利益を追求しようとするものにとっては、「平和の声」は邪魔者とされる。



- 1954年 冷戦強化のなか、米ソの核実験が繰り返され、米軍の太平洋上のビキニ環礁での実験で焼津のマグロ漁船「第五福竜丸」が被爆、久保山愛吉さんが亡くなった。「死の灰」といわれ、放射能汚染の恐ろしさが全国民に拡がった。「第五福竜丸」以外にも多くの船や船員が被爆していた事実が封じられていたことが明らかにされつつある。
- 1955年 杉並から署名運動が始まり約3200万人（人口の約3分に1）の署名が集まり、第1回原水爆禁止世界大会は広島で開かれた。
- 1956年 「日本原子力基本法」成立。「原子力平和利用博覧会」各都市巡回。「日本原子力研究所」設立。（東海村）
- 1957年 立川基地拡張反対運動により砂川村の強制測量中止。「被爆者健康手帳」交付。
- 1960年 日米新安保条約反対運動盛り上がるも、調印。
- 1961年 広島投下の136万発分の爆弾が蓄積。
- 1965年 日韓基本条約締結。 東京オリンピック

- 1970年 日本万国博覧会（大阪） 関西電力美浜発電所営業開始。
- 1971年 東京電力福島第一原子力発電所営業開始。
- 1972年 沖縄復帰。日中国交正常化。 石油ショック
- 1974年 電源三法成立。原子力発電所をつくるごとに、地方自治体に交付金を配布。
- 1975年 ヴェトナム戦争終結。
- 1978年 第1回国連軍縮特別総会。
- 1979年 アメリカ、スリーマイル島原子力発電所事故・・・レベル5
- 1985年 東京電力柏崎刈羽原子力発電所1号機営業開始。
以後7号機は1997年、営業開始。総電気出力821.2万KW。
世界最大出力
- 1986年 旧ソ連、チェルノブイリ原子力発電所事故・・・レベル7
- 1990年 冷戦終了。
- 1994年 「原子爆弾被爆者に対する援護に関する法律」成立。
- 1999年 東海村 JOC 臨界事故。作業員の方が2名死亡。
- 2001年 9.11アメリカ同時多発テロ事件。
- 2003年 イラク戦争（～2011）
- 2004年 自衛隊イラク派遣差止め訴訟、原告約3000人。2008年違憲判断。
美浜発電所3号機二次系配管破損事故
- 2007年 中越沖地震により柏崎刈羽原子力発電所に3000カ所のトラブル。
これを教訓に東京電力は免震重要棟設置。2010年より運用開始
- 2008年 「在外被爆者援護法」成立。（現在、被爆者健康手帳取得者約4300人）
- 2011年 東日本大震災・福島第一原子力発電所事故・・・レベル7（最悪レベル）
- 2013年 （概数 世界の原発・・・400基以上。日本の原発・・・50基以上）

Ⅲ. 今、思うこと、必要なことは何か

私は、20世紀半ばに生を受け、21世紀初めの今日まで、無事生きてきた。とりあえず、不便なく、元気に暮らしている。しかし、2年4ヶ月前の東日本大震災・福島第一原子力発電所事故は、大きな不安をもたらした。今も、事故の全容がわからず、収束の目安もたないままである。しかも政府は、「直ちに健康に影響はない」「収束した」経済成長のためには「再稼働する」日本の原子力発電所は事故に学んで安全だと「輸出」セールスを首相がやり始めた。何という言葉の軽さ！！何という無責任！！避難している方々は現在約15万人。半年、1年ならまだしも、2年以上も見通しのないまま、「応急仮設住宅」をあてがわれたままである。「応急」とは、～年というものではないはずだ。

「アベノミクス」というものが、この国の閉塞感を吹き払ったという。確かに、若い人の就労・労働条件は厳しい、改善しなければならない。安倍首相は、経済成長を進めるからと、高い支持率がある。又、隣国が強い態度ででているから、「日本人として誇りを取り戻そう」「国家は従軍慰安婦に関与していない」で通そうとしているが・・・。

以前のような経済成長を望み、経済大国を目指すのは無理だと思う。第3次産業革命ともいべき IT の普及により、情報・もの・人の移動・動きが早くなり、地球は狭くなった。世界が一体化して、多くの国・地域・人が市場にどんどん参入する。だから、競争が厳しくなるのは当然である。少子高齢化などの社会構造の変化、都市に人口が集中する一方、過疎化・地域の崩壊という不安も拡がっている。

こうした社会の変化に対して、国家・民族間の緊張を高めたり、格差を拡大・放置、大災害・事故の経験に学ばず、経済成長のためのインフレ化を推進するのは、ある日、転んで立ち上がれず、呼吸も出来ず、核の冬？に落ち込むのではないか、という恐れをもつ。

放射能廃棄物の処分場の当てさえ持つことのできない原子力発電所（トイレなきマンション、と例えられる）には頼らず、安全な廃炉に向けて智慧をしばってほしい。原子力発電所建設の裏には、核保有という野心もあったという。恐怖を押しつけて富を占有しようとする安全保障政策はリスクが大きすぎる。

原子力発電所事故は「国策」の結果だったからと、官僚も会社も個人も、誰も責任をとらない。近代国家の中心となる都市を支えるために農山漁村が犠牲になってきた。息子を戦場に工場に送った。過疎の進む地に原子力発電所がつくられ、交付金があり、雇用がうまれる。確かにしばらくは潤うことになった。しかし、事故が起これば対処できる代物ではなく、数百年かけて営々とつちかかってきた故郷の暮らし―山・川・空・家族・仕事・地域・・・が失われた。

百年前の1910年、隣国を植民地化したということも又、隣国の人々に故郷を捨てさせることだった。今、福島の人々は、豊かな自然と人々の営み・歴史ある故郷を放射能によって捨てることを強要されている。

その痛みを両方とも、見ようとしないう安倍内閣に将来を託せるとは思えない。「世界の人々と仲良く元気に暮らす」という当たり前の人間としての権利のためには、もっと、多くの人々と語り合い、政治を私達の手に取り戻さなくてはならないと思う。国策を進める政府を選ぶ糸の一端を、私達は今渡されているのだから。

（追記）

6月上旬、広島平和記念公園を見学した際、確かに小中高の修学旅行生が多かった。私にとって新鮮だったのは、外国人見学者が目立ったことだった。帰ってから、以前、知り合いから、平和のためのヒロシマ通訳者グループによる「平和公園ガイド」（CD付き、2005年発行）があるとして、1冊いただいていることを思い出した。そして、昨夕のテレビで外国人観光客が日本で一番見たいと思っている所は「広島平和記念資料館」だという調査結果を紹介していた。外国人は日本の経験を真剣に学ぼうとしているのだと思う。

2013. 6. 30



柏崎刈羽と広島

佐藤

5月18日、19日再稼働阻止全国ネットワーク主催の「柏崎刈羽再稼働阻止応援ツアー」に川辺さんと参加した。4月9日にたんぼぼ舎で行われた柏崎刈羽バスツアーの説明会に川辺さんと出席し、柏崎出身で原発反対を長く続けてこられた菅井益郎氏の話を受けて、感銘を受けての参加だった。

このツアーは東京からの2台のバス80人に加えて、福島からは「原発いらない福島の女たち」のメンバーがマイクロバスで、青森、富山その他の地からも車で駆けつけ、18日午後2時からの柏崎刈羽原発反対地元三団体が準備したツアー受け入れ集会には、合計約120人が参加した。

その集会では、地元の柏崎刈羽原発に対する長い闘いの話のほか、各地からとして、福島からは連帯ユニオンの佐藤昌子さん、大熊町から避難生活をしている木幡ますみさんの発言、大間、東海村、志賀（羽咋）などから来られた方の話もあった。司会は刈羽村村議会議員の近藤容人さん。

ところで、今回のバスツアーでは、男女別に宿が分かれていた。

そして、私たち女性の宿の2次会には、刈羽の女性たち「刈羽村生命を守る女性の会」から4名が来られた。この2次会がこのツアーでの大きな収穫の一つだったと思う。

まず、福島の女性たちの話をじっくり聞いたことだった。

ツアー受け入れ集会では、「原発いらない福島の女たち」のメンバーのうち2人が代表して話をされたが、2次会では一人ずつ話をされた。

その中で、特に心に沁みしたのは大熊町から会津に避難している木幡さんの話だった。大熊町ではいくら除染をしても切りがない。「福島各地で除染した土は、大熊町に置いておくべきだ」と話したことだった。「被災前に住んでいた町にはもう帰れない」と、きっぱりと言う。潔いがその気持ちの奥底には、どんなにつらいものがあるだろうと思った。

次は、「刈羽村生命を守る女性の会」の方々へ会えたことだった。やはり、一人ずつ話をされたが、柏崎刈羽原発そばの桜の花から異常が発見されて以来、毎年、桜の花の調査をし

ているとのことで、そのことにも触れられた。刈羽村という人口 5 千人以下の小さい村で、原発反対という活動を地道にされている姿が印象深かった。

最後は、加納実紀代さん（女性史研究者）に出会ったことだった。福島から来られた木幡さんが、被爆者手帳の話をしたときに、加納さんが自分を広島に被爆者と告げてから、話を始めた。そして、「広島の被爆者たちはいろいろな権利を勝ち取ってきた。福島の人たちもそのように頑張らなければならない」と話された。

私は 2 次会で加納さんの隣に座っていたので、来月広島に行く予定なので、バッグに入れていた「観光コースではない広島」を取り出し、広島ではどこに行ったら良いかなどと相談した。加納さんは、「被爆時、5 歳だったけれどすごかった」と、そして、本に載っている地図で住んでいらしたところや、お父さんが働いておられた大本営跡の写真を示し、そこでお父さんは消えてしまったと話された。それから、今年、広島と福島についての本を出版したと教えていただいた。後で、その本「ヒロシマとフクシマのあいだ：ジェンダーの視点から」を手に入れ、広島に行く前に読んだ。新たな視点で広島、福島を見ることができ、大変参考になった。

翌 19 日は見学コース（バス 2 台）と街宣コース（車 2 台）に分かれて行動した。



見学コースは、前日の集会で司会をされた近藤さんに、柏崎刈羽原発周辺を案内していただいた。断層の見える砂浜、原発遠景、椎谷岬、真殿坂（まどがさか）断層という原発立地内まで届いている断層を見学した。なお、この地域は地盤が弱く、どんどん沈んでいるため、道路には「川のない橋」がかけられている。

また、柏崎刈羽原発の PR 館にも行ったが、停電のために展示館は見学できないと言われた。「停電は、私たちのツアーに見学させないためでは？」との声がツアーのメンバーから上がった。その後、刈羽村生涯学習センター（ラピカ）にも立ち寄った。この施設は「電源立地促進対策交付金」で作られたハコモノで、非常に立派な建物である。その隣には「原発はいらない」と大きく書かれた看板のある木造 2 階建ての団結小屋が建っている。

この見学コースには、近藤さんの他にも闘争に関わっている方が、随時、顔を出され、説明があった。

行き、帰りともバスの中では、柏崎刈羽関係の DVD を上映したが、帰りのバスには菅井益郎氏が私たちのバスに来られ、柏崎刈羽原発反対闘争の話をしてくださった。

今年の日韓合同授業研究会交流会は陝川で行われるが、陝川は「韓国のヒロシマ」と呼ばれている。日本の植民地時代、多くの人々が暮らしに行き詰ったり、土地を奪われるなどで海を渡り、陝川から行った人々の多くは親戚や知り合いがいた広島に住んでいたとのことである。そして、被爆後、広島から故郷の陝川に帰ったため、陝川に被爆者が多いのだと言われている。また、広島は第五師団がおかれていた軍都でもあった。

これまで私は広島に行ったことがなかったので、陝川に行く前に訪れたいと思い、川辺さんと 6 月 5 日～7 日の日程で広島に行った。

広島には羽田から向かったが、晴天に恵まれ、飛行機から瀬戸内海の島々がよく見えた。広島駅近くのホテルに荷物を置いてから、市電に乗り、原爆ドームに向かった。

原爆ドームの周辺には、修学旅行の生徒たち、少人数のグループ、また、海外からの観光

客など大勢の人々がいた。私たちが行った時は、原爆ドームは壁の調査中とのことで足場がかかっていた。

その側にある鈴木三重吉文学碑を見てから、元安橋を渡って、平和記念公園に入った。すぐに「原爆の子の像」が目に入る。しばらくすると、小学校の修学旅行の一団が「原爆の子の像」の前でセレモニーを始めた。学校で何度も練習してきたようで、台詞を言い、歌を歌い、最後は持ってきた千羽鶴を「原爆の子の像」の側の保管所に納めていた。一生懸命な様子だが、先生の指示通りにしている感じがした。

広島平和記念資料館では、被爆者が日本だけではなく韓国など海外にもいることなどが、いろいろな展示箇所にかかれていた。陝川の原爆被害者診療所の写真もあった。しかし、広島平和記念資料館が作られた時代のためか、平和利用のための原子力については疑問を持っていないような展示をしているように感じられた。

広島平和記念資料館を見学した後は、平和記念公園内の被爆アオギリ（旧広島通信局で被爆し、その後平和記念公園に移植）などの碑巡りをした。

なお、平和記念公園内の隅に、広島県在留朝鮮人帰国者が1959年12月に建てた朝鮮民主主義人民共和国帰国記念時計があるが、非常に分かりにくいところで見つけるのに苦労した。

また、平和記念公園には韓国人原爆犠牲者慰霊碑が建っている。これは1970年4月に韓国居留民団広島県本部によって平和公園の外に建てられたものを「公園外にあるのは差別ではないか。公園内への移設して欲しい。」との要望により、1999年公園内に移設されたものだそう。

広島2日目の6日午前中には、比治山にある広島市現代美術館と陸軍墓地に、午後からは、まず、本川小学校平和資料館に行った。本川小学校は爆心地に最も近い学校で、外部を残して全焼、10名の教職員と約400名の子どもたちなどの生命が奪われ、奇跡的に助かったのは2名だけだったと言われている。現在、地下室のある旧校舎の一部が保存され、公開されている。平和資料館の資料などが置いてあるコーナーに、実話を基にした絵本「いわたくんちのおばあちゃん」が置いてあった。

何気なく読み始めたら、その話に引き込まれ、その場でほとんど読んでしまった。

その後、前日に引き続き、再び平和記念公園に行って、国立広島原爆死没者追悼平和記念館に、そして峠三吉詩碑などの碑巡りを行った。

広島3日目の7日は、午前中に川辺さんと宮島に行き、親戚のところに寄る川辺さんと別れてからもう少し宮島を見学した後、広島に戻り、広島城址に行った。

広島城址は、今は天守閣と二の丸が復元されているが、大本営があったところであり、大本営跡と石柱が残っている。「軍都広島」の象徴で、日本の侵略戦争、加害の歴史の原点のような場所と言われている。また、その一角には広島護国神社もある。

広島に原爆が落とされてから、もうすぐ68回目の夏を迎える。広島で私が出会った人々は、みな戦後生まれだった。広島を中心には平和記念公園があり、修学旅行生や観光客が多く訪れるが、戦後生まれの人には原爆は遠い日のことになっているのかと、また、原発はよそ事なのかと思われた。

しかし、昨年の広島市長の「平和宣言」には、核兵器廃絶を訴えるだけでなく2011年3



月 11 日の原発事故について触れ、「被災者の皆さんの姿は、67 年前のあの日を経験したヒロシマの人々と重なります。皆さん、必ず訪れる明日への希望を信じてください。私たちの心は、皆さんと共にあります。」と書かれている。広島が原爆を語るだけではなく、原発にも目を向け始めたと思った。

また、夕食をしに入った食堂の奥さんが、「広島は福島からは離れているけれど、隣の山口県には中国電力が原発を建設しようとしているので、広島の人にとって原発事故は他人事ではありません」と話されたことが、心に残った。

原爆被爆者補償と在外被爆者に関するメモ

安藤

はじめに

今回の交流会を前に、原爆被爆者に対する補償はどのようになっているのか、そして在外被爆者、特に韓国・ハプチョンに居住する被爆者の現況について、簡単にまとめてみました。さらに「福島」へ思いをはせたいと思います。

① 原爆被爆者補償のための法律

被爆者への補償については、(1) 1957 年制定の被爆者医療法と(2) 1968 年制定の被爆者特別措置法があります。(1) の法律において、広島・長崎の原爆投下時の被爆者とその直後に両市に入った者について、被爆者の定義づけがなされ、いわゆる被爆者手帳の交付が始まりました。そして(2) の法律は(1) で医療特別手当の支給をうけられなかった被爆者や原子爆弾小頭症手当支給や健康管理手当の支給など、補足的内容でした。(1)・(2) の法律は 1995 年原爆被爆者援護法という法律に一元化されました。

② 韓国における在外被爆者救済の経緯

①の(1)(2) の法律とも対象者に関して国籍等の規定はありませんでした。しかし実際には、対象となる被爆者であることを証明する手続きが煩雑であることと、被爆者手帳の交付申請の窓口が都道府県(広島・長崎は両市)であるため、在外被爆者が補償申請するためには、厳しいハードルとなっていました。このことから原爆投下時、長崎・広島には多くの朝鮮人がおりましたが、(後述) 彼らへの補償は事実上想定されなかったとも考えられます。

さらに 1965 年の日韓基本条約の中で、在韓被爆者については補償済みという見解が生じてしまいました。

この動きに抗して韓国で 1967 年社団法人韓国原爆被害者援護協会(現韓国原爆被害者協会)が発足し在韓被爆者の渡日と手帳交付申請の運動がおこりました。1970 年には佐賀県で密航の容疑で逮捕された孫振斗氏が 72 年福岡県への被爆者手帳交付申請を却下されたことをうけて、福岡地裁へ提訴しました。この裁判は 1・2 審とも孫氏の勝訴となり、1978 年最高裁においても孫氏が勝訴しました。また 1979 年には自民党と韓国民主党政策委員会の間で合意がなされ、1980~87 年にかけて渡日治療がテストケース的に行われました。日弁連も韓国被爆者協会会長の申請を受け、「在韓被爆者問題第一次報告書」を作成しました。しかしこの動きにもかかわらず 87 年には渡日治療が事実上打ち切られてしまいました。(打ち切り後、韓国政府が在韓被爆者対策を発表した。)

1990 年日韓首脳会談で在韓被爆者に対して「人道的医療支援」の名目で支援金が補償の代

わりに示されました。しかし使用用途について、「治療費、健康診断、センター建設費」というように特定されました。この支援金から陝川原爆被害者福祉会館が建設されましたが、韓国での保険医療適用範囲や、対応する病院に限られるなど、被爆への幅広い救済にまではなりませんでした。

その後、日本国内では、日本から出国した後も健康管理手当受給権を有するという 2002 年大阪高裁判決を受け、03 年には省令改正により日本出国者へも健康管理手当受給が認められました。また同じ 02 年には在外被爆者の渡日支援事業として手帳交付希望者の渡日費用の助成が行われるようになりました。

しかし渡日という条件はすでに多くが高齢となっている在外被爆者には高すぎるハードルとなっていました。そこで 2008 年には、渡日せずに日本大使館において当時所在した都道府県知事に手帳交付申請ができるようになりました。また 04 年から在外被爆者の居住国での医療機関受診の自己負担にたいする助成も行われるようになりました。

このように少しずつ被爆者救済の動きは進んでいるようにもみえますが、それ以上に被爆者の高齢が進んでおり、被爆の証明が難しくなっているなど、必ずしも在韓被爆者問題が解決に向かっているとは言えない面も多いのです。

③ ハプチョンの被爆者の現状

大韓民国慶尚南道陝川郡は小白山脈に近く、山がちな地形で平地が少ない場所です。そのため元来生活手段が少なく、日本支配時代の早期から日本へ渡る人が多かったのです。特に広島へはすでに居住する知人を頼って移る者も多かったようです。当時広島は工業・軍事都市で、労働力を必要として多くの朝鮮人がおりましたが、それゆえに朝鮮人被爆被害者を増やす結果になってしまいます。

(広島と長崎の被爆者のうち、70000 人近くが朝鮮人という。特に広島での被爆死は約 1 万 6 千人と、広島での爆死者の 10 人に 2 人は朝鮮人だともいわれます。また被爆後祖国に戻った被爆者は、韓国に 23000 人、北朝鮮に 2000 人とされます。※在韓被爆に関する QandA より)

日本の敗戦後、多くの朝鮮人が祖国へ帰還しました。父母が韓国人で自身は 1930 年広島生まれである李順基氏の記録(「閃光に灼かれて、五十六年」)によりますと、広島で被爆したのち 1945 年 12 月に帰国しその後父の故郷陝川郡に帰ることができたが、生活は苦しく、1950 年には朝鮮戦争もはじまって、大変苦労されたということです。そして 1945 年以降陝川郡に帰国した人々にも原爆症は襲いかかりますが、治療費が払えず、薬草・民間医療に頼るしかないという人々がほとんどでありました。また原爆症や治療について知る医者も韓国には皆無でした。

韓国原爆被害者協会に登録されている 2010 年 9 月末時点での生存被爆者は韓国国内に 2639 名そのうち陝川は 633 名が居住しています。しかも陝川出身者が全登録者の半分から 3 分の 2 ではないかということです。また陝川の前爆被害者福祉会館には約 110 名入居していますが、130 名が入居待ち状態であるということです。(福祉会館関係については 2010 年 7 月の数値)

④ 北朝鮮・その他の被爆者の現状 そして福島へ

2007 年 10 月原水爆禁止日本会議(原水禁)は北朝鮮にわたり在朝被爆者の聞き取り調査を行っています。しかしその被害実態については不明な点も多く、韓国だけでなく、

北朝鮮での調査も急がねばなりません。さらにいうなら、朝鮮半島のみでなく、台湾その他のほかのアジアの被爆者の実態についても私たちはほとんど知らないのが現状です。これは「日本が唯一の被爆国」であるという呪文に縛られた結果と考えるのは、乱暴すぎるでしょうか。被爆地にいたのは日本人だけではありません。自分たちの被害者意識のみ原爆被害を語ろうとするのではなく、私たちは「加害」の問題をも想起すべきでしょう。「原爆は神の罰」という言葉に憤る前に考えてみる冷静さも必要なのではないのでしょうか。怖いのは「忘却」です。

福島原発事故でも、放射線被害や事故の原因について、十分考慮されずに、もう再稼働の動きが出ています。原発事故で我が家を追いだされた人々はたくさん残っているのに、まるでそんな人々を早く忘れ去ってしまおうとしているように。「被害者は2度殺される。」一度目は他の誰かに、2度目は「忘却」あるいは「無関心」という怪物に。



「原爆」も「原発事故」も人間が起こした災いであることをしっかりと記憶に留めること。そのためには今なにをしたらよいのか、私たちは未来から試されているのではないのでしょうか。

そんな気持ちをこめて、私は今回の交流会に参加したいと思います。

(参考文献) 在韓被爆に関する QandA (韓国原爆被害者協会)

「閃光に灼かれて、五十六年」(李順基)

原水爆禁止日本会議ニュース電子版 (2007. 11)

いまは他人（ひと）の土地一奪われた野にも春はくるか 李相和

わたしは全身に陽光を浴び 青い空と青い野が交わるところめざして
カリマ(*)のようなあぜ道を夢の如く歩いて行く
口をつぐんだ空よ野よ わたしにはひとりで来たような気がしないのだ
おまえが誘ったのか誰が呼んだのか もどかしい 答えておくれ
風は耳元でささやき 一歩も立ち止まるなど裾をゆすり
ひばりは垣根越しの乙女のように雲の間で嬉しそうにさえざる
ありがたく育った麦畑よ ゆうべ夜半を過ぎて降った美しい雨で
おまえは麻束のようなその髪を洗ったのか わたしの頭まで軽くなったよ
ひとりでも勇み行こう 乾いた田を抱いて流れるやさしい小川は
乳飲み子をあやす唄をうたいひとり踊り行くよ
蝶よ燕よ そんなに急かすな たんぽぽや野の花にも挨拶しなけりゃ
ひまし油塗った人が草刈した野だからしっかりと見ておきたい
この手に鎌を持たせておくれ ふくよかな乳房のようなこの土を
足首が痺れるほど踏みしめ心地よい汗をも流してみたい
川辺に戯れる子供のように 飽きもせずきりもなく駆けまわるわが魂よ
何を探しているのか 何処へ行くのか 可笑的ではないか 答えておくれ
わたしは全身に草の香をまとい 青い微笑と青い悲しみが交わるなかを
足を引きずり一日中歩く どうやら春の神霊にとりつかれたようだ
しかし今は 野を奪われ 春すらも奪われるというのか

* カリマ 髪分け目の白いすじ

韓日合同教育研究会・日韓合同授業研究会

第19回 陝川交流会 実施要項

テーマ「原爆から原発まで、苦痛の歴史に向き合う教育」

子どもたちの思いをうけとめて

日本側実行委員長 藤田

釜山から西へバスで3時間程の所にある慶尚南道の陝川は「韓国のヒロシマ村」と呼ばれている。広島・長崎で被爆したのは日本人だけではない。10数カ国の人々が被爆している。特に韓国・朝鮮人は5万人が被爆し、3万人が亡くなったという。そして、陝川には広島で被爆して、韓国に戻り厳しい暮らしをしてきた人が多く住んでいる。

1995年第1回交流会で報告した堀越さんのテーマは、「原子力発電について考える ―こんなに電気、必要ですか―」であった。まとめには、「私達が学習をして心を痛めたことは、原発問題は環境問題だけでなく、地域住民の生活や生存権の問題が絡み合っていることだ。」とあった。また、生徒の感想には、「僕の住んでいる福島県に10基もあり、家から30km離れたところに原子力発電所があって、原子力発電所の爆発の範囲は100kmで、僕の住んでいるところはもう住めなく、長年の思い出も火の底へ。原子力発電所に食われてしまう。」と書いてあった。

原爆と原子力発電。この二つは、別のもののように思わされてきた。原爆も原発も同じ核融合を使ったエネルギーを利用するものだが、片方を「核」、片方を「原子力」と呼び、そのことがまるで異なるもののような印象を与えた。

福島・広島・陝川。実践を通して子どもたちの未来を語り合おう。

2013年8月2日(金)～8月5日(月) (3泊4日) アフター(8月5日～6日)

場所 韓民国慶尚北道星州郡修倫面白雲里 1282-4 伽倻ホテル

日程

8月2日(金) 12:00 プサン駅付近でバスに乗車

講演「コバルト鉱山民間人犠牲者」とはなにか。

チェスンホ(慶山新聞社代表/発行人)

コバルト鉱山被害地域フィールドワーク

開会式および食事 国別モイム

8月3日（土）フィールドワーク

陝川平和の家 1) 講演 2) 「患友の家」訪問

居昌追慕公園 (1) 資料館解説

(2) 墓訪問

8月4日（日）授業報告・研究協議

共同教材 「平和を夢見るどんぐりの木」

(1) 韓国-チョンヨンジュー人間、技術、生態、価値の観点から

見た6年生たちの原子力エネルギーに対する認識—

(2) 日本-善元幸夫「やくそくのどんぐり」と沖縄の子どもたち

授業報告 2 (1) 日本-福島朝鮮学校の実践報告-遠藤正承

(2) 韓国-10代の現実-キムミンギョン

研究および実態報告

(1) 日本-原発近くの子どもの声

「一瞬にして消えた豊かな自然」-堀越伸

(2) 韓国-密陽送電塔反対対策委員会の声-コジュンギル

レセプション

8月5日（月）全体会 反省会

講演 チョンジュハ（写真作家）

ホンスングァン（夢見る平和歌手）

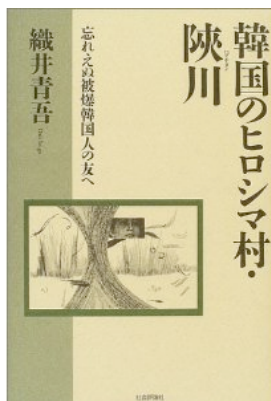
閉会式

交流会参加費

350,000 ウォン（約 31,500 円） 学生 300,000 ウォン（約 27,000 円）

アフター参加費未定。参加者は、会費（年 3000 円）の納入もお願いします。

現地までの交通費は別途自己負担。



新著紹介

『東学農民戦争と日本—もう一つの日清戦争—』

中塚明・井上勝生・朴孟洙著 2013年 高文研

波多野

「侵略の定義は学界的にも国際的にも定まっていない。国と国との関係でどちらから見るかで違う。」(4月23日、参院予算委) 安倍晋三首相のこの発言は、かれの近代史に対する驚くべき無知をさらけ出した。また日韓間の歴史認識をめぐる外交関係の悪化について、あるニュースキャスターは7月2日朝、「困ったものです」とコメントした。なぜ困るのか？日本側が事実をありのままに認めさえすれば済むことではないか？このような歴史認識がまかり通っている現状を見ると、自分を含めて歴史教師たちはこれまで何を伝えてきたのかと自省せざるを得ない。

本書は一般的に日清両国間の戦争と捉えられている日清戦争は、実はまず東学信徒を初めとする朝鮮民衆と日本軍との戦いだったことを明らかにしている。「除暴救民 輔国安民 斥和洋」のスローガンを掲げて蜂起した東学農民軍鎮圧に名を借りて朝鮮に出兵した日本軍は、東学軍が日本による侵略の危険を察して政府と和議を結ぶと出兵の根拠を失い、王宮を占領し王を脅迫して、清国から「朝鮮の独立を守る」と称して開戦の口実とした。これに対して農民軍が再び蜂起すると、日本軍は宣戦布告もしないまま「討伐」にかかり、東学農民軍3万～5万人を殺した。これが侵略でないなら何だろう。井上氏はさまざまな原資料を使ってその実態を明らかにしている。ソウル駐在公使井上馨の派兵要求を大本営の伊藤博文総理大臣は直ちに受け入れ、川上操六兵站總監は東学農民軍を「ことごとく殺戮すべし」と

いう命令を出した。火縄銃と竹槍しか持たない農民軍に対してライフルを持つ 4000 名の日本軍の殺傷力は圧倒的だったが、地理にうとく、住民の協力が得られない日本軍は苦戦を重ねつつも、ついに全羅南道の珍島まで追い詰めて制圧した。「打ち殺せし者四十八名、負傷の生捕十名、生捕は、拷問の上、焼殺せり」「大いに拷問」「ことごとく銃殺」「民家ことごとく焼き打ち」と記録されていて徹底した殲滅作戦だったことがわかる。朝鮮の民族自立の運動、革命の萌芽をこうして日本が潰したことの意味は大きい。

農民軍との戦いで日本軍の戦死者はわずか1名だった。ところが靖国神社の記録ではかれは農民軍との戦いではなく、清国との戦いで死んだとされ、戦死の日付も違っている。なぜか。それは、日本が、内外の非難を恐れ「王宮占領」に続いて、上記のような農民軍との戦闘を戦史から抹殺し事実を偽ったことと同時に、朝鮮農民の主体的行動を評価しなかったことを意味する。その結果、日本人の朝鮮観の貧しさ・偏りが生まれたことを中塚氏は旧著『歴史の偽造を正す』『司馬遼太郎の歴史観』（いずれも高文研）に続いて説く。司馬も「韓国自身の意志と力でみずからの運命をきりひらく能力は皆無とってよかった」と書いている。

「東学」は無知蒙昧な民衆が信仰した迷信、という見方も日本には根強くある。しかし東学は、神秘的宗教的側面はもちろんあったが、万民平等・民生の安定・国の自主自立を目指す思想であった。東学の「十二か条軍号」には、「敵と対する時、わが兵は刀を血に染めずして勝つ者を第一の功とする。やむを得ずして戦うとしても、切に命を傷つけぬことを尊しとする。」とあるのだ。日本の軍人が「我隊、始めて狙撃をなし、百発百中、実に愉快を覚えたり」と書いた野蛮さと何と対照的だろうか。日本人がこのような事実をありのままに知ることこそ、日韓間の歴史的和解への第一歩であろう。

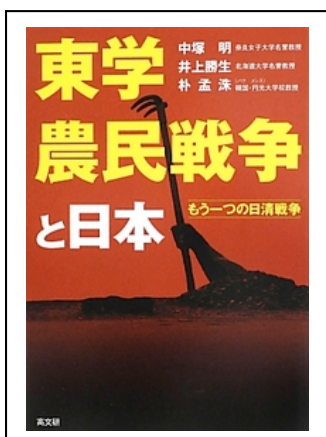
朴氏は 1980 年の光州民衆抗争のとき、徴兵された軍人として鎮圧する側にあった。のちに自分が加害者であったことを知って苦しみ、「個人の良心と集団の良心とは必ずしも一致しない。自分の良心を誠実に守るためには、個人みずからが道徳的に実践するだけでなく、その個人を取り巻く社会が道徳的かつ良心的でなければならない」と考えた。

そのときから韓国社会を変えるための努力を始めた朴氏は、近代韓国の苦難の歴史の原点、東学農民戦争にたどり着き、東学に対する評価・関心の低さに疑問を持って研究を始め、二人の共同執筆者と出会うことになった。3 人の筆者はともに学びあい、東学の故地をたどるツアーを組織し、東学の精神を感じ学ぶ旅を続けつつ市民レベルでの連帯を作ろうとしている。その中で朴氏は秩父事件や田中正造に出会って連帯できる日本人を見出した。

韓国では 2004 年に「東学農民革命軍の名誉回復に関する特別法」が成立したし、これまでの「甲午農民戦争」という呼び名に変えて「東学農民革命」と呼ぶことが定説になっている。同時にご他聞にもれず独裁者・朴正熙や全斗煥がまるで自分がその継承者であるかのように装って建てた権威主義的な顕彰碑に変えて、民主化運動の中から民衆の立場に立って作られた記念碑(古阜や参礼の)が生まれ、東学の見直しが進んでいる。

200 ページにも満たない小さな本だが、明かされていく内容は驚くべきものだ。また筆者たちの真実を求める努力、連帯を築こうとする熱意が篤く感じられ、心から尊敬の思いが沸く。

本書が広く読まれて正しい歴史認識が広がるのが切に望まれる。



短信

*いよいよ、陝川交流会です。期待で胸が高まります。まだ申し込んでいない方、まだ間に合います。ご連絡ください。

交流会では、李相和の詩「奪われた野にも春は来るか」を題名にした写真集を出している鄭周河（チョンジュハ）さんの講演もあるそうです。福島の秋と冬を静かに描いた鄭周河写真展は、この夏佐喜眞美術館で行われます。

暑い夏です、ご自愛ください。(F)

ウリ 87号 2013年7月20日

日韓合同授業研究会

〒102-0074 東京都千代田区九段南3-9-11

マールコート麹町303

吉峯総合法律事務所内

事務局連絡先（事務局長 藤田）

E-mail larrabee1991@yahoo.co.jp

会費納入先

郵便振替 00170-1-428530 一瀬